

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 20 日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25770137

研究課題名(和文)17世紀以降の日中における『詩経』図解の展開に関する研究

研究課題名(英文)The study on the illustration of SHI JING in 17th century Japan and China

研究代表者

原田 信 (HARADA, Makoto)

近畿大学・経営学部・講師

研究者番号：00633447

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本、中国に現存する『詩経』図解を調査し、その変遷や編纂背景を分析した。この結果、現存する早期の『詩経』図解である南宋の「毛詩正变指南図」は南宋、元代を通じて学者や書店により改編され、これらが明代以降の『詩経』勅撰書に取り込まれ他の図解の基礎となっていたこと、明代中期以降、『詩経』解釈の変化や科挙の影響、書店の活動により勅撰書の図解の改編や、新たな図解の編纂が行われたこと、中国では『詩経』の動植物を图示した図解が清代乾隆年間によようやく編纂され、日本の図解としては、岡元鳳『毛詩品物図考』がほぼ唯一中国に影響を与えた日本の図解であることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study attempted to research the illustration of SHI JING 詩経 existing in Japan and China, and analyzed these transitions and backgrounds. Findings indicate the following three points. First, The MAO SHI ZHENG BIAN ZHI NAN TU 毛詩正变指南図, which is one of the earliest existing illustrations of SHI JING compiled in Nan Song 南宋 period, was incorporated into SHI JING texts compiled by the imperial court. Second, after the middle of Ming dynasty, some significant changes (e.g., the influence of the imperial examination Keju 科挙 and the activity of bookshops) contributed to the reorganization of the illustration of SHI JING and the compilation of new illustration. Finally, the earliest existing illustration of animals and plants described in SHI JING was compiled during the Qing dynasty 清朝. Moreover, Oka Genpou's MOU SHI HINBUTSU ZUKOU (岡元鳳『毛詩品物図考』) was almost the only Japanese illustration that impinged on China.

研究分野：中国文学

キーワード：『詩経』図解の変遷 『詩経』図解の利用 『詩経』図解の編纂背景 『詩経』解釈と図解の関わり

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始する前に、報告者は現存する早期の『詩経』図解である宋版『纂図互注毛詩』や『監本纂図重言重意互注点校毛詩』の巻頭に附された図解やが、版本によって全く異なることに着目した。

その後、中国に現存する歴代の『詩経』図解を比較してみると、天文地理や制度、器物など、各時代を通じて収録内容に共通点が多くあることを発見した。これに対して、江戸時代以降多く編纂された日本の『詩経』図解は、中国の図解のような内容をもつものは少なく、相当数は動植物の図解を収録している。

このように、中国の『詩経』図解にはある一定の形式が存在していること、そして日中の『詩経』には、収録内容の傾向に大きな違いがあることがわかった。

『詩経』図解には時代や地域による異同や特色がある。この背景には、当然歴代の『詩経』解釈の変化や、『詩経』に記された名物に対する関心の在り方、ひいては学術や生活風俗、趣味の違いが関わっているだろう。

以上のように、『詩経』図解の研究価値は『詩経』自体の解釈にとどまらなると考えられたのだが、『詩経』を主要な対象とした研究のみについて言っても、これまでの研究ではほとんど取り上げられることがなかった。

そこで、報告者は本研究を開始する前年に、論文『『詩経』注釈史における「毛詩挙要図」の意義』(『日本中国学会報』64号、2012年)を発表し、南宋の書肆が編纂した『纂図互注毛詩』の付録「毛詩挙要図」について、その内容が同じく南宋の『六経図』に収録されている「毛詩正变指南図」を改編したものであること、そして利用の面では主に科学受験の学習のために用いられたが、一方では朱熹のように『詩経』名物の考証に用いた学者も存在していたことを指摘した。

本研究を行うこととした動機は、この論文の内容を基礎として、日中ともに盛んに『詩経』図解が編纂された17世紀以降の図解を対象として比較した場合、『詩経』図解の研究価値と意義をより多角的に捉えることができるのではないかと考えたことにある。

2. 研究の目的

本研究は、17世紀以降に編纂された『詩経』に関する各図解について、これらの編纂や改編、利用状況、『詩経』解釈の変化との関わりを分析し、日中両国の『詩経』図解間に存在する差異の背景と原因を解明することを目的とした。この差異は主に以下の二点である。

- (1) 中国の歴代の『詩経』図解の大部分は、その原型となった南宋の「毛詩正变指南図」の形式を踏襲しており、部分的な改編を重ねて展開した。この形式とは、図解の内容が詩序や年譜、天文地理、制度、器物に関する図によっ

て構成されており、『詩経』を解釈する上で古来より重視されてきた動植物の図が、清代に編纂された徐鼎『毛詩名物図説』を除き、ほとんど存在しない。

- (2) 日本の図解は、一部に(1)で述べた中国的な形式をもつ図解が存在するが、大部分は動植物を図示したものである。

3. 研究の方法

「1. 研究開始当初の背景」のなかで述べたように、本研究を開始する以前、すでに南宋の「毛詩挙要図」の考察に着手しており、この図解に近い南宋や元代の図解の内容についても、図解相互の比較を通じてどのような関係性にあるのか、分析をすすめていた。

しかし、本研究を開始した時点では、そもそも各時代にどのような『詩経』図解が現存しているのか、そしてこれらの内容や特徴はどのようなものかという、『詩経』図解の研究を行う上で基礎となる事実をまとめた形で発表した論著が存在していなかった。

そこで本研究では、以下のような手順で行うこととした。

- (1) まず17世紀以降の歴代『詩経』図解の現存の有無と編者およびその経歴を調査・整理し、各図解の比較を通じて、これらの内容構成に見られる特徴を明らかにし、論文として発表することから着手する。

この点については、本研究開始の前年度に論文『『詩経』図解本の変遷 宋から明初まで』(早稲田大学中国文学会編『中国文学研究』第38期)を発表し、現存する明代初期までの『詩経』図解に関して整理を終えていたので、同様のことを、その後の時代の図解を対象にして行うこととする。

- (2) 次に、(1)の過程で整理された現存する図解のうち、編纂者や現存する版本数などから、広く利用され、特に他に大きな影響を与えたと考えられる図解を分析する。

- (3) 本研究開始前に行った調査により、中国における『詩経』図解の大部分は、南宋の「毛詩正变指南図」を原型としていることが推測された。これは(1)の過程によって実証した。一方、図解調査の過程では、この原型に当てはまらない図解が、主に明代中期以降より存在していることがわかった。これら例外的な図解も『詩経』図解の展開を解明する上で重要な手がかりであるため、このような図解が登場した背景について分析を試みる。

(4) 日本の『詩経』図解についても、上記(1)~(3)と同様の手順で調査・分析を行う。

(5) 上記(1)~(4)から得られた結果をもとに、日中の『詩経』図解が異なる特徴をもつ背景を『詩経』の解釈や社会制度、生活風習、学術の傾向など複数の観点から分析する。

4. 研究成果

本研究二年間にわたる成果は以下の通りである。

(1) 平成25年度

平成25年度では、研究開始後の調査により、明代初頭に編纂された勅撰書『詩経大全』の付録「詩経大全図」(版本によっては「詩伝図」ともいう)が清代初頭に至るまで広く普及し参照されたうえ、清代に編纂された勅撰書『欽定詩経伝説彙纂』の付録「詩伝図」の底本となったことが明らかとなった。これは、17世紀以降の図解の特徴を考察する上で重要な事象であると考えられたため、まずこの勅撰書に附された両図解の分析を試み、その結果を論文「『詩経大全図』と『詩伝図』- 明清期の勅撰『詩経』図解について -」をまとめた。この論文では、「詩経大全図」が代の学者である羅復や劉瑾により編纂された『詩経』図解をそのまま収録したこととその原因や明代から清代初期にいたるまでの「詩経大全図」の普及状況、そして「詩経大全図」と清代の「詩伝図」にみえる注釈を調査し、結果として「詩伝図」では、もっぱら朱熹の学説を採用した「詩経大全図」の内容から、朱熹の学説と漢唐の注疏を折衷するよう改編が行われていたことを明らかにした。この結果については、口頭発表「《詩経大全図》與《詩傳圖》- 從明清時期的勅撰《詩経》図解看宋元圖解之繼承與展開 -」を通じて発信し、中国内外の学者の意見を求めた。

このほか、本年度は、調査を通じて中国では最も早い時期に図解の学術的意義を提唱した鄭樵の『図譜略』の内容とその著述意図が、17世紀以降の『詩経』図解の利用を考察する上で不可欠だと考えられたため、論文「鄭樵『圖譜略』の著述意圖について」をまとめ、その意図が宋代の学術状況、特に義理の学に対する鄭樵の批判と、博物学的興味にあったことを指摘した。

(2) 平成26年度

平成26年度は、前年度の調査研究を通じて明代以降の『詩経』図解の大部分は勅撰書の付録を底本とするか、その影響を受けていることが明らかとなったことから、これとは異なる図解の編纂がどのように行われたのかに着目し、調査を行った。

この結果、新たに発見した図解を含めて、明代中期以降に編纂された三種の図解 - 胡

賓『詩経図全集』、胡明勗『詩経集成図説』、鍾惺に仮託したと考えられる書肆編纂の『詩経図史合考』 - が勅撰書の付録図解とは異なる特徴を具えていることが明らかとなった。そこで、これら三種の図解の内容と特徴、及び編纂の背景について論文「明代『詩経』図解の変化について - 嘉靖年間以降の図解三種を中心に -」のなかで論じた。

本論文では、明代中期以降、勅撰書の付録図解より古い元代の図解の価値が再認識され、付録の図解を改編する動きが起こったこと、そしてこの状況は、勅撰書の付録図解が国家により広められ、画一化した『詩経』図解に対する反作用として発生したと推測されることなどを指摘した。

この指摘についても、口頭発表「胡賓《詩経圖全集》學術意義的探討」を通じて国内外の研究者に発信し、意見を求めた。

本研究の目的からすれば、本来達成する計画であった以下の点が達成できなかった。

(1) 清代の『詩経』図解については現存する大部分の図解の調査を終え、整理を行ったが、研究期間内に発表するには至らなかった。

(2) 日本の『詩経』図解についても、日本など比較的容易に閲覧できるもの、そして一部の稿本については調査を行い、データを入手した。しかし、調査の過程では、想定よりも多くの図解が存在していることが明らかとなり、研究期間内にすべての調査を終えることができなかった。

(3) 上記(1)、(2)の原因により、日中の『詩経』図解の特徴を比較について、期間内に発表した論文のなかで部分的に言及したにとどまり、詳細な分析を行うことができなかった。

以上未達成となった課題については、引き続き調査、分析を行っていく予定である。

また、本研究では先述した未達成の内容を含めて、『詩経』図解に関する新たな課題がいくらか顕在化した。これも本研究の成果だと考えられるため、以下に列挙する。

(1) 中国において編纂された『詩経』図解のうち、動植物を図示したものは、現在まで確認されるかぎり乾隆年間の徐鼎『毛詩名物図説』一種のみである。しかし、清代末期には日本の岡元鳳『毛詩品物図考』が多くの『詩経』テキストに収録されている。このことから、中国の『詩経』図解解釈において『毛詩名物図説』が必ずしも特異な図解だとは言いきれなくなる。中国の『詩経』解釈や学習において動植物

の図解がどのように利用されたのか、そしてその意義はどのように考えられたのか、検討する必要がある。

- (2) 日本においては、早い時期に伝わった『詩経』図解は元代や明代のものである。特に、明代の「詩経大全図」は日本においても江戸時代初期に翻刻されており、ある程度参照されたと考えられるが、江戸時代中期は動植物の図解が多く編纂されており、「詩経大全図」のような中国式の図解は江戸時代を通じてあまり流行しなかった。

しかし、経学の学習を目的に編纂された『詩経』テキストには「詩経大全図」とよく似た図解が収録されている例もあり、また同時期の学者の著作のなかには、「小戎」(戦車)や建築制度など、「詩経大全図」にも収録される内容の一部を精緻に考証したのも伝わっている。日本の『詩経』図解を分析するうえでは、本草学者を中心に編纂された動植物の図解の流れを調査するとともに、『詩経』考証を目的に著されたであろう図解の流れについても考慮する必要がある。

- (3) 日本では、江戸時代初期より動植物の図解が編纂されたが、江戸中、後期には徐鼎『毛詩名物図説』が伝来したようで、翻刻本が伝わっている。日本の『詩経』動植物の図解に中国の図解が影響を与えたか否か、そして当時の日本人が『毛詩名物図説』をどのように認識し受容したのか。日本の『詩経』図解を分析する上では、このように伝来した書物の影響も考慮する必要がある。

- (4) 日本独自の現象として、動植物を図示した各図解が編纂されたのとほぼ同時期に、『詩経』の名称を冠した物産書なども著されている。その時期からして、動植物の図解と物産書の編纂とは何らかの関係があると推測される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

原田信、明代『詩経』図解の變化について - 嘉靖年間以降の圖解三種を中心に -、中国文学研究(早稲田大学中国文学会)査読有、第40期、2014、38-54、<http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/handle/2065/45175>(早稲田大学リポジトリ)

原田信、「詩経大全圖」と「詩傳圖」 - 明清期の勅撰『詩経』圖解について -、中国文学研究(早稲田大学中国文学会)査読有、第39期、2013、21-40、<http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/handle/2065/41563>(早稲田大学リポジトリ)

原田信、鄭樵『圖譜略』の著述意圖について、早稲田大学大学院文学研究科紀要、査読有、第58輯、2013、53-63、<http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/handle/2065/39251>(早稲田大学リポジトリ)

〔学会発表〕(計2件)

原田信、胡賓《詩経圖全集》學術意義的探討、中國古籍研討會、2014年12月27日、北京大学、北京(中国)

原田信、《詩経大全圖》與《詩傳圖》 - 從明清時期的勅撰《詩経》圖解看宋元圖解之繼承與展開 -、文本、詮證、傳播：中國典籍與東亞文化交流學術研討會、2013年12月28日、復旦大学、上海(中国)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

原田 信(HARADA Makoto)
近畿大学・経営学部・講師
研究者番号：00633447

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：